旧樺太守備隊司令官宿舎 (1908) の現況と設計者について

THE PRESENT STATE OF THE FORMER OFFICIAL RESIDENCE FOR THE COMMANDER OF KARAFUTO- GUARDS (1908) AND ITS DESIGNER

角 幸博 — *1 井瀬 裕 — *2
石本正明 — *3

Yukihiro KADO — *1 Hiroshi ITANI — *2
Masaaki ISHIMOTO — *3

キーワード:

サハリン, 樺太, 樺太守備隊, 官舎, 田村鎮

Keywords:

Sakhalin, Karafuto, Karafuto guards, Official residence, Yasushi Tamura

We describe the history and the present state of the Official Residence for the Commander of Karafuto-Guards, which was completed in 1908. We also deal with its suspected designer, Army Architect Yasushi Tamura (1878-1942), who is known as the designer of the Divisional Headquarters Office of the Imperial Guards. The official residence has high value in the modern architectural history not only because it is one of the oldest buildings of the Japanese colonial period in Sakhalin, but also because it was a dwelling house built for the people of highest class in Sakhalin.

1. はじめに

戦前期日本の海外植民地における建築活動に関する研究は、1980年代頃から実施されている¹⁾。一方、南サハリン(旧樺太)における日本統治期の建築活動については、筆者らの一連の研究²⁾はあるものの、まだ不十分といわざるを得ない。現存する日本期の主要建築については、井瀬裕ほか「南サハリンにおける日本統治期(1905～1945)建築の現存状況」(日本建築学会技術報告集No.5)³⁾で報告しているが、樺太庁豊原医院(現ロシア陸軍病院、1931)、樺太庁中央試験所本館(現ロシア科学アカデミー極東支部サハリン科学センター、1934)、樺太庁博物館(現サハリン州郷土博物館、1937)、樺太庁会議室(現ロシア軍関連施設、1934)、北海道拓殖銀行豊原支店(現サハリン州立美術館、1931)、北海道拓殖銀行大泊支店(現コルサコフ市所有建物、1929)、樺太守備隊司令官宿舎(現ロシア陸軍法務局サハリン州軍管区裁判所、1908)などが挙げられる。

このうち、樺太守備隊司令官宿舎について、1999年5月31日、6月1日および2000年9月22日に、主に平面・立面図作成のための実測調査を実施することが出来た。現役の軍区裁判所という建物の性格上、調査時間の確保が難しく十分な調査とは言い難いが、州行政、軍管区裁判所および州郷土博物館の協力により調査が実現できたことは、近年の日ロ友好関係の進展の結果である。本稿は、実測調査結果をもとに、旧樺太守備隊司令官宿舎建物の沿革と現況、設計者に関する考察をふまえ、本建物の史的価値について報告し、本建物の今後の取り扱いについて、日本とロシアやサハリン州の友好協力によって、一刻も早い保存修復の一助となることを期待するものである。

2. 旧樺太守備隊司令官宿舎の沿革

司令官宿舎は、1908年11月頃に旧豊原東3条南1丁目、樺太守備隊司令部の南向かいの追分通(のちの真岡通、現サハリンスカヤ通)を挟んだ位置に建設された⁴⁾。設計は、後述の樺太守備隊司令部建築係、陸軍技師田村鎮と推定され、建設は北海道の建設業者伊藤亀太郎(現伊藤組)が43,451円62銭で請け負った⁵⁾。同建物については、竣工以来少なくとも4度の転用が確認されている。1913年4月24日付守備隊撤退後、1920年9月1日に樺太庁博物館に転用された⁶⁾が、1934年に豊原憲兵分隊設置とともにその庁舎として利用された。第二次大戦末期には樺太守備隊(陸軍第88師団)司令部として利用され、現在はサハリン州軍管区裁判所として使用されている。

3. 樺太守備隊と建築活動

守備隊司令官宿舎の概要にふれる前に、樺太守備隊について説明しておこう。端的に言えば、樺太守備と陸軍諸施設の建造と保護を目的とした第7師団(北海道旭川)隷下の組織である。1904(明治37)年勃発の日露戦争で、日本軍は1905年7月28日、全島占領を宣言した。9月3日に日露休戦条約が成立し、9月7日樺太守備隊司令部が設置された。同年8月28日には占領地域に民政署が設置されている。民政署は、占領地域の秩序維持を目的におかれる臨時行政機関で、重要な決定は守備隊司令官の裁可を必要とし、活動予算も陸軍省からの臨時軍事費から捻出された。また兼任や嘱託が多く、人事面でも定員などの制約が厳しい組織であったと推察される。

樺太民政署は1907年4月1日廃止され、樺太庁が設置される。樺

*1 北海道大学大学院 助教授・博士(工学)
(〒060-8628 札幌市北区北13西8)

*2 小淵フェローシップ 研究員・博士(工学)

*3 北海道大学大学院 助手・博士(工学)

*1 Assoc. Prof., Graduate School of Eng. Hokkaido Univ., Dr. Eng.

*2 Researcher., Obuchi Fellowship., Dr. Eng.

*3 Research Assoc., Graduate School of Eng. Hokkaido Univ., Dr. Eng.

太民政署・樺太庁共に陸軍の隷下組織であり、統治期初期においては樺太守備隊の建設工事とほぼ並行して、民政署・樺太庁による官舎建設工事が行われていた。

樺太守備隊司令部の構成はほぼ毎年のように変化するが、1907年で、司令官1、参謀1、副官2、主計正1、主計2、軍医正1、技師1、属1、技手5(名)であった。主計(経理担当係官)や軍医も、直属の上位組織は、第7師団の経理部や軍医部で、その動静はそれぞれの上位組織の長に「区所を受ける」⁷⁾ 必要があった。1907年4月現在の構成員一覧⁸⁾の中で、建築技術者と考えられるのは、田村鎮(技師)、熊井一輔⁹⁾、清水元次郎¹⁰⁾、鈴木恒助¹¹⁾(以上技手)である。これらの技術者は、1907(明治40)年から1909年にかけて、つまり豊原で守備隊施設工事が実施されていた時期にのみ配属されており、樺太守備隊守備隊営地の建設工事への技術者投入であることは明らかである。1909年以降は技術者の赴任は無く、守備隊の営繕組織は臨時的性格であったと考えられる。この期間に建設された主要建物として、司令官宿舎の他、司令部庁舎(1907年11月30日竣工、30,214円25銭)、衛戍病院(1908年10月31日竣工、122,474円)、宿舎・共同浴室(1908年8月30日竣工、3,306円20銭)などがあげられる。

4. 旧樺太守備隊司令官宿舎の現況

4.1 外観(写真1)

かつての真岡通(現サハリンスカヤ通)に正面を向けているが、丁度この建物をコの字型に囲んで集合住宅(クバルティエーラ)が建つため、通りからはみえない。旧来の正面は北面であったが、現在正面玄関は閉鎖されている。北側正面の左右非相称の大小2つの三角ペディメントが特徴的である。1階煉瓦造、2階木造で、主棟は寄棟屋根。外観は上下階で水平分節し、創建時の写真(写真2)によれば、1階と2階とで色を塗り分けたツートンカラーの建築であった。南面には木造平屋切妻平入の下屋を設けていた。外壁は四周ともモルタルで塗り固められ、現在は薄桃色の彩色を施している。

外観デザインはネオ・ゴシックを意識し、玄関廻りに顕著にゴシック要素を展開している。概形は、旧状をよく残しているが、2階外壁のリブの喪失、2階北面中央バルコニーの室内化、2階北面バルコニー欄間の三葉アーチ飾りの喪失、1階北面西側バルコニーの改変、窓建具の変更など細部変更と、主屋と付属屋接合部の玄関増築などが指摘される。特に、北面西側の2階バルコニーのたわみと1階旧バルコニー部の胴コーニスの漆喰装飾や外壁の剥離は目視できるほど大きい。主棟南側に付属する現法廷は、切妻平家で、創建当初の板張り外壁を現在はモルタル塗に改修している。屋根は屋根材を含め改変はほとんどないが、葺板や妻面各部に傷みが目立つ。

用途変更は前述の通り多いが、豊原憲兵分隊時代の古写真(写真3)

を見る限り外観上大きな改修点はなく、主な改修はソ連時代になされたと考えられる。図1は現状、図2は痕跡調査と古写真から復原した北側正面立面図である。

4.2 内部

建物は、逆L字型主棟の南側に平家が付属し、主棟は最長部で南北17,080mm(56.4尺)、東西20,200mm(66尺)、従棟は桁行(東西)13,800mm(45.5尺)、梁間(南北)6,370mm(21尺)である。1階主屋76.1坪、平家35.4坪、2階78.5坪、延べ床面積190坪である。

1階(図3)は、北面中央の旧玄関ホールに間仕切り壁が補設され、所長室(現在未使用)、副所長室、判事室、守衛室の他は未整理の文書庫としている。旧玄関ホール、判事室・所長室、副所長室には、暖炉が遺存する。南側付属室は、法廷、独房として使用している。旧玄関ホール西側の階段は、反時計回りのゆるやかな廻り階段で、親柱や手摺り子などに旧状をよく留めている。階高は4,275mmと実測された。

2階(図4)は、軍事務長室・秘書室などとして利用し、1階と同位置に暖炉を配置する。西側のベイウインドーをもつ比較的大きな部屋は、応接間や居間などに使用されたと考えられるが、暖炉などの暖房装置はみられず、現在は未使用である。小屋裏では棟札は発見できなかったが、小屋組はキングポストトラス、暖炉の煉瓦造煙突は、使用煉瓦からソ連時代の改修であることを確認した。

5. 設計者

本建物の設計者を直接示す資料はないが、樺太守備隊司令部付陸軍技師として建設活動を推進した田村鎮の可能性を指摘しておきたい。資料として、防衛庁防衛研究所戦史資料室所蔵『明治三十七八年戦役陸軍政史 第六巻』(陸軍省編纂)、北海道大学附属図書館所蔵『明治職官表』(内閣書記官室記録課、1907)、『帝国大学出身名鑑』(佼友協会、1932)、『建築雑誌』昭和17年4月号「田村鎮君を悼む」(日本建築学会、1942.4、記事は中村与資平筆)、東京帝国大学工学部建築学科付属図書館所蔵の技術者カード「田村鎮」を用いた。

田村は1878(明治11)年10月24日、東京府芝区で生まれた。学習院を経て東京帝国大学建築学科に入学、1905(明治38)年卒業し、まず雇員待遇で陸軍省に奉職した。翌年、陸軍技師に任官、樺太守備隊司令部付となり、ほぼ同時に樺太民政署御用掛兼勤の辞令を受けている。この時点まで樺太民政署には建築技術者はいなかったようなので、彼の赴任まで民政署は本格的な建築活動をしていなかったと考えられる。また、この時期は豊原の区画測設がほぼ終了し、守備隊営地建設計画が始動する時期であった。防衛庁戦史資料室所蔵『明治三十七八年戦役陸軍政史 第六巻』によると、1905年8月11日発令の満

写真1 旧樺太守備隊司令官宿舎現況

写真2 創建時の樺太守備隊司令官宿舎
(伊藤組蔵)

写真3 豊原憲兵分隊時代の旧司令官宿舎
(『樺太庁施政30年史』より)

写真4 樺太庁長官官舎 (伊藤組蔵)

発第 6932 号として以下の既述がみられる。

「八月十一日 第十三師団における兵舎倉庫等建築工事に従事せしむる為、陸軍省雇員工學士田村鎮を樺太に派遣するに決し左の事項を訓令し、其旨次官より參謀次長に申渡し、其向へ通達方要求す

- 1・建築工事の業務に就ては第13師団兵帖監部附建築主任官の指示を受くべし
- 2・将来建築すべき永久建築物に就き、左記の事項を調査研究の上報告すべし

- イ 該地の風土に適する建築物の概要
- ロ 兵舎宿舍及庁舎の採温方法
- ハ 冬季における点灯の方法
- ニ 給水の方法
- ホ 樺太島に於ける建築用材の品種価格及利用の方法
- ヘ 将来建築用材としてし得き品種及其方法

田村には、南サハリンにおける建築の構造や構法を研究する義務が課されていたのである。残念ながら、この訓令に対する彼の報告書は見つかっていないが、田村が技師職であったことを考え合わせれば、樺太守備隊の諸建築は彼の研究結果に基づくものと考えられるべきであろう。しかし、田村鎮はまだ帝大を卒業したばかりである。実務経験の乏しい彼を補佐した技術者の存在は充分考えられるが、現段階では不明である。またこの時期には帝大の1年後輩である橋本勉¹²⁾が、樺太民政署嘱託技師として任ぜられている。この点も田村の招聘と考えられるが確証はない。

1906年3月31日、民政署は廃止となり翌日樺太庁が開庁する。田村も4月1日付けで樺太庁技師兼任陸軍技師を任じられ、5月1日に再び樺太守備隊付の辞令を受けている。この時点から彼を中心とする守備隊司令部建築係あるいは樺太庁建築課の一員は、諸官庁の設計を開始したものと考えられる。いずれの組織も少人数の組織であり、しかも要求されている建築物は多数にわたるため、両方の長を努めた田村は多忙を極めたと推察できる。彼の南サハリンでの活動は、1908(明治41)年6月30日付けで、陸軍技師専任、陸軍臨時建築本部付の辞令を受けるまで続いた。

主要建築物の着工日を伊藤組所蔵の工事請負契約書から確認すると、

樺太守備隊司令部庁舎	1907(明治40)年7月18日
衛戍病院宿舍・付属屋	1908(明治41)年2月8日
衛戍病院・付属屋	同上
守備隊司令部官舎	同上
守備隊司令部暖炉格納庫	1908(明治41)年5月23日

図1 北立面図(現況)

というように、6月30日段階ですでに設計を終えて工事に入っていることがわかる。そのため、田村鎮の転任時点で主要建築の大方の設計作業が終了していたと考えるのが妥当で、設計作業後に転任したと考えられる。樺太庁技師としての具体的活動を示す資料はないが、唯一の建築技師であった彼の役割は大きかったと見るべきであろう。彼自身も若かったが、彼の周りの技手たちも同様に学校を卒業したての若者ばかりだったからである。

1908(明治41)年6月30日付けで東京へ転任した田村は、陸軍臨時建築本部付けとなる。ここで彼は近衛師団司令部庁舎(現国立近代美術館工芸館、1910年、重要文化財)の設計に携わった。その後は、軍用気球の研究委員会に属したり、欧米への出張などがあるが、具体的な建築活動については不明である。陸軍技師退官は1920年、その後は東京渋谷で建築設計事務所を経営した。この時期の活動も明らかではないが住宅設計を主とした¹³⁾らしい。1929年頃から1936年頃までは、『建築学会会員名簿』で「田村鎮建築設計事務所」の項を確認できる。『建築雑誌』(昭和17年4月号)「田村鎮君を悼む」で、中村与資平は田村の人柄について、趣味は多岐に渡り、俳句、囲碁・将棋、ビリヤード、謡曲などをたしなみ、その生活は「贅沢からは完全に手を切って」「徹底的に無頓着な」「一生を趣味に貫いた」「飄々とした高い風格」「誰に対しても丁寧懇切を極め、いはゞ地味な性格の人と評されるもの」と伝えている。

6. 旧樺太守備隊司令官宿舍の歴史的評価

守備隊司令官は、樺太庁長官よりも上位であった。樺太守備隊司令官宿舍は、樺太で最高位にあった者が居住する住宅建築である。重厚かつ華やかな印象を与える外観は、当時の豊原市街でも耳目を集める意匠であったと考えられる。この司令官宿舍は、やはり伊藤組によって建てられた樺太庁長官官舎(1908年ころ、写真4)とよく似たデザインをしている。基本的平面は同じで、別な意匠を施したともいえるかもしれないが、長官官舎の軽快さに対して司令官宿舍は同じゴシック様式でももっと豪奢な印象すら与え、守備隊司令官と樺太庁長官の職差が建築デザインに反映したものとも考えられる。その類似性は、樺太守備隊、樺太庁がお互いに協力体制をとったり、影響を及ぼしあっていたことの証左である。両者の建築組織が、田村鎮技師により統括されていたことと、深い関係のあることも推察される。

さらに1階を煉瓦造とし暖炉を設置するなど、寒冷地に適応した建

図2 北立面図(復原)

図3 1階平面図 (現況)

図4 2階平面図 (現況)

築を模索する一方で、防寒的に不利なバルコニーを多用し、南面下屋の雪処理を考慮しない屋根形状などの矛盾も指摘される建築である。また、設計に田村鎮の関与を指摘できる建築であり、田村の代表作近衛師団司令部庁舎以前の活動を示すものとして、またこれまでに確認されたサハリンにおける統治期建造物の中で現存最古である点、かつ当時の最高職位用の住宅建築としても注目され、その史的価値は極めて高いといえる。

平面や詳細な立面に関する十分な復原考察は課題として残されており、かつ軍事施設であるため、積極的な保存活用提言は難しいが、竣工後90年以上経過し、傷みも目視されるようになっており、日口両国による一刻も早い修理修復の必要性を強調しておきたい。

謝辞

本研究は、(財)住宅総合研究財団平成10年度研究助成および平成12年度文部省科学研究費補助金(基盤研究(B)(2)課題番号12572027)の助成を得た。また、実測図作成にあたり北海道大学大学院学生角哲吾の協力を得た。ここに記して謝意を表する。

注記

- 1) 越沢明『植民地満州の都市計画』(アジア経済研究所、1978年)、同『満州国の首都計画』(日本経済新聞社、1988年)、同『ハ爾濱の都市計画』(総和社、1989年)、西澤泰彦『20世紀前半の中国東北地方における日本人の建築活動に関する研究』(東京大学学位論文、1993年)、同『図説「満州」都市物語』(河出書房新社、1996年)、同『海を割った日本人建築家 20世紀前半の中国東北地方における建築活動』(彰国社、1996年)、西田貴志『南満州の近代建築』(私家版、1996年)、西澤泰彦『図説満鉄「満州」の巨人』(河出書房新社、2000年)など。
- 2) 入来晴之ほか2名「伊藤組の旧樺太・朝鮮における建築請負活動—北海道」
- 3) 井濶裕、越野武、角幸博、高橋学「南サハリンにおける日本統治期(1905

戦前期の建設業者に関する研究(1)」(日本建築学会北海道支部研究報告集(以下支部研報)No.68,1995.3)、井濶裕ほか3名「日本統治時代(1905～1945)におけるサハリン(旧樺太)の建築(1)コルサコフ(旧大泊)」(支部研報No.69,1996.3)、高橋学ほか3名「日本統治時代(1905～1945)におけるサハリン(旧樺太)の建築(2)ユジノサハリンスク(旧豊原)」(支部研報No.69,1996.3)、高橋学ほか3名「南サハリンにおける日本統治初期(1905～1915)の建設活動と営繕組織」(支部研報No.70,1997.3)、井濶裕ほか3名「日本統治期の南サハリンにおける建設請負業者」(支部研報No.71,1998.3)、高橋学ほか3名「樺太日日新聞にみる昭和初期南サハリンの建築活動」(支部研報No.71,1998.3)、井濶裕ほか2名「樺太庁技師貝塚良雄(1900-1974)の経歴と建築活動」(支部研報No.72,1999.3)、Hiroshi Itani, Takeshi Koshino, Yukihiro Kado "Some Aspects of Building Construction in Southern Sakhalin during Japanese Colonial Age(1905-1945): Buildings, Architects, Contractors and Building Sections of Government Offices" (ACTA SLAVICA IAPONICA, 17, 2000)、井濶裕「日本期の南サハリンにおける建設活動に関する研究」(北海道大学学位論文、2000)などがある。

- ～1945)建築の現存状況」(日本建築学会技術報告集No.5,1997.12)、
- 4) 守備隊司令官官舎及附属家他一廉新営工事」(工事請負契約書、株式会社伊藤組土建所蔵)による
 - 5) 注4)に同
 - 6) 全国樺太連盟『樺太行政沿革史』(1978) p.310
 - 7) 『職員録』(明治41年)
 - 8) 『職員録』(明治40年)
 - 9) 第7師団経理部から転任。東京工手学校1898(明治31)年卒業。1907年前後から1909年度まで在職。
 - 10) 第7師団経理部から転任。1907～1908年在職。1909年には樺太庁技手。
 - 11) 1904年東京工手学校卒業。1907～1909年在職。
 - 12) 東京帝国大学工科大学建築学科1906年卒業。同年7月13日民政署に赴任。在職は1907年1月頃まで。
 - 13) 「前陸軍勅任技師、工学士田村鎮君の業界に於いての功績や、特にすぐれた住宅建築に於ける地位については、私以外に書く人も多からうし、また周知の事実なのだから」(『建築雑誌』昭和17年4月号「田村鎮君を悼む」(中村与資平)より)

[2001年4月20日原稿受理 2001年7月27日採用決定]